

特別展示

「京都の戦国時代—応仁の乱から本能寺の変まで—」によせて

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



展示風景

京都市考古資料館では、平成 25 年度後期特別展示として「京都の戦国時代—応仁の乱から本能寺の変まで—」を開催しております。

戦国時代は日本の歴史における中世から近世への変換期です。畠山義就と畠山政長の軍勢が衝突し、応仁・文明の乱の戦端を開いた上ごりょう御霊社（御霊神社）の戦いから、明智光秀が織田信長を襲撃した本能寺の変まで、戦国時代の京都では幾多の合戦が行なわれました。

戦乱の時代にあって、京都に生きる人々は、戦時に備えて堀や土塁などの防御施設を構築し、時には自ら武器を手にして戦い、中に

は一向一揆や法華一揆として結び付く大きな勢力が生まれました。

また、商工業の発達により流通・経済活動が進展するとともに、土倉・酒屋と呼ばれる有力な商人が成長し、花を活けたりお茶を飲んだりする現代につながる生活文化が普及していくのも、この時代の特徴です。こうした当時の京都の町並みや人々のようすは、『洛中洛外図屏風』に生き活きと描かれています。

一方、発掘調査の進展により、洛中洛外の山城・居館・寺院・集落にさまざまな規模の堀や土塁が造られたこと、山科本願寺の焼き

討ちや天文法華の乱で大きな被害があったこと、出土した陶磁器や銅銭から商工業が活発であったことなど、当時の具体的な有り様が明らかになってきています。

今回の特別展示では、応仁・文明の乱から本能寺の変までの、戦乱に関わる遺跡の調査写真、絵巻物に描かれた町並み、さまざまな出土遺物を展示することで、京都の戦国時代を考古資料から紹介します。

繰り返し戦乱の被害を受けながらも、たくましく復興を続けた戦国時代の京都の人々の姿をご覧ください。 (山本雅和)



山名宗全邸跡と西陣の石碑

応仁・文明の乱では、堀川上立売交差点南西側にあった山名宗全邸が西軍の本拠地となり、後にこの地域は西陣と呼ばれるようになった。京都市考古資料館には西陣の由緒を記した石碑がある。



天龍寺旧境内の堀

天龍寺旧境内の調査では、堀の中から応仁・文明の乱で焼失した建物の瓦が出土した。瓦は火災の高温により焼けただけで変形し、赤く変色している。火災の激しさが伝わる出土遺物である。



山科本願寺土塁断面

山科本願寺は運如が山科盆地中央部に建立した寺院である。周囲には大規模な堀と土塁が築かれ、寺内町が形成された。土塁は粘土質の土と砂や小石を多く含む土を交互に叩き締めながら積み上げており、高さは5 m以上におよぶ。



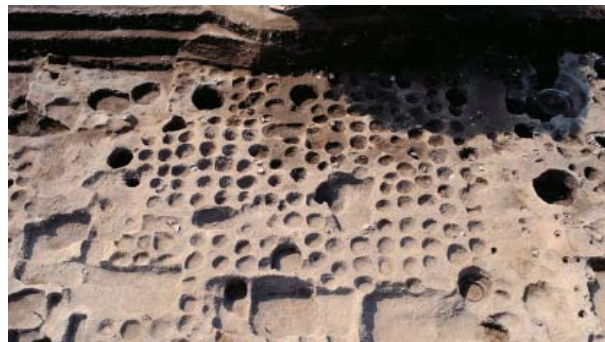
妙泉寺の石垣

妙泉寺は松ヶ崎の山裾にあった法華宗の寺院で、天文5年(1536)の天文法華の乱では延暦寺衆徒らの攻撃を受け焼失した。斜面を成形して屈曲する石垣が築かれており、その一部は松ヶ崎小学校校内に移築復元されている。



下京惣構の堀

戦乱に備えて洛中の上京・下京には、市街地を囲む防御施設である惣構が造られた。下京東側の惣構の堀は、幅約6.5 m・深さ約2 mで、緩やかに湾曲しながら南東方向へ延びている。



下京の酒屋

酒を醸造した甕を据付ける半球形のくぼみが東西約15 m・南北約16 mの範囲に並ぶ。当時の酒造りは甕の中に米・麴と水を入れて自然発酵させており、常滑産や備前産の製品が用いられた。



銀閣寺の溝の石垣と石樋

銀閣寺(慈照寺)は足利義政が造営した東山山荘が前身である。境内山ぎわには大きな石材を積み上げた溝があり、また、湧水を建物まで導く、細長い花崗岩に溝を加工して蓋をした石樋が見つかった。



武家御城の石垣

武家御城(旧二条城)は織田信長が足利義昭のために築いた城郭で、地下鉄烏丸線建設にともなう調査で二重に廻る堀の石垣が見つかった。石垣の石材には、石仏・石塔・墓標・石臼などの石造物が転用されていた。